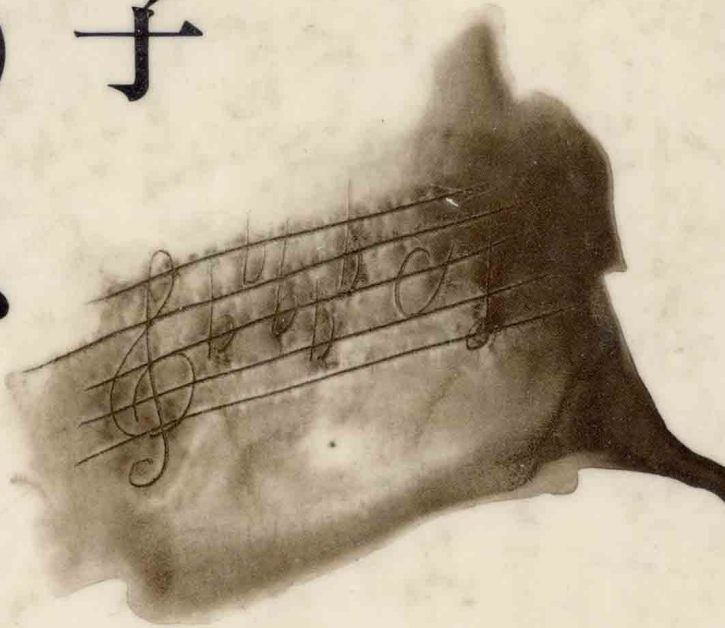
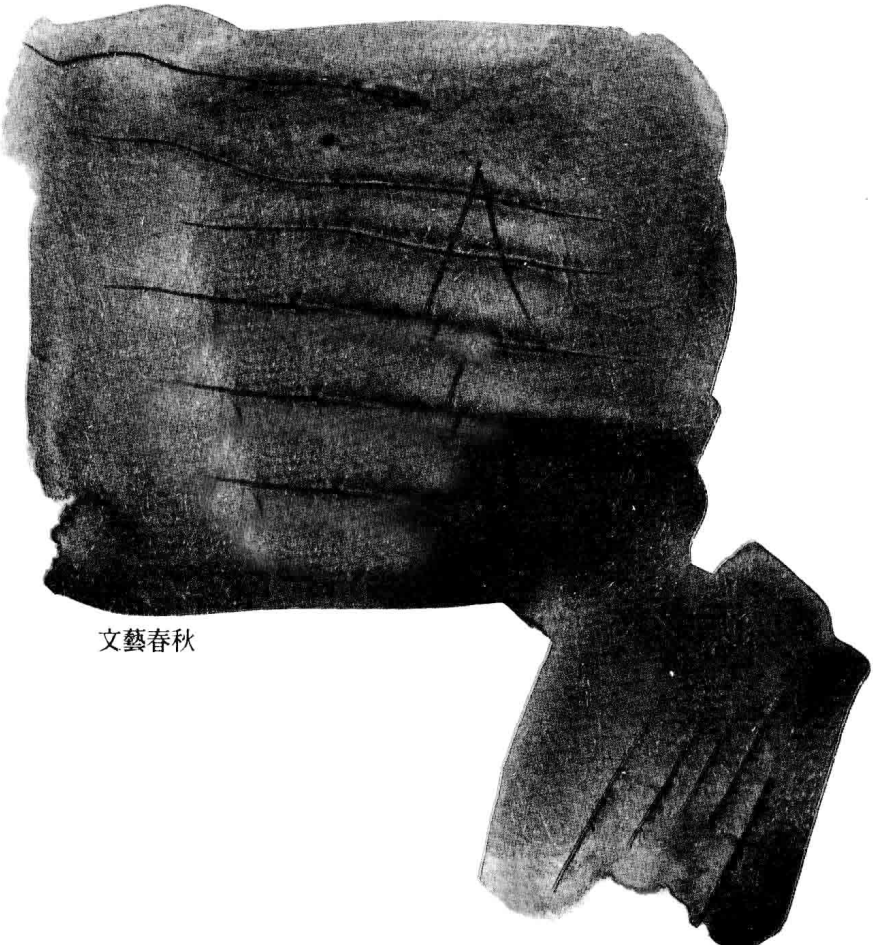
演歌の虫

山口洋子



演歌の虫

山口洋子



文藝春秋

演歌の虫

昭和六十年三月二十日　第一刷
昭和六十年八月　五日　第三刷

定価　九八〇円

著者　山口洋子
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五・一二一一
印刷　凸版印刷
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

©Yoko Yamaguchi *1985* Printed in Japan

貢ぐ女　5
弥次郎兵衛　59
老梅　121
演歌の虫　151

裴幀 司 修

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

演歌の虫

貢(みつ)ぐ女(おんな)

一

眼を覚ますと、男の姿がなかった。

隣りのベッドの毛布がぽかりと割れて、ふたつ重ねた枕のまん中が頭のかたちのままで凹んでいる。

トイレかな、耳を澄ましてみるが、水音もしない。例のくせで早く眼を覚まして朝刊でも買いにいったのだろうと、のろのろと上半身を起こし、昨夜消し忘れた枕スタンドのうすぼんやりとした灯りで時計の針をたしかめてみる。

——七時半。

よく寝たものだと恭子は足の爪先を揃えて伸ばし、はずみをつけて立ちあがって男のベッドの毛布とシーツの間に手をいれてみる。人肌のぬくもりのかけらも残っていない、ひやりとした冷めたさだけが指先に伝わってくる。あわてて手を引きぬき、入口の扉をみにゆく。

男が買いにいったはずの、いく種類かのスポーツ紙が、扉の下の透き間から乱雑につっこまれている。昨夜のうちに男がフロントに頼んでおいたのだろう。新聞もみないで、一体どこへいってしまったのか。

居ないとわかっていて、バスルームをあけてみる。冷え冷えと湿った空気、鏡のまえの歯ブラシも、髭剃りも封が切ってない。首を傾げながら部屋の中央にもどり、ぐるりと見まわしてみると、あった。サイドボード兼デスクの、TVの乗っかっている横に、メモとルームキイが置いてある。（わるい、ねむれない。外出します。もし帰りが遅れたら、チェックアウトよろしく、SIN）

最後のところに四・一〇と時間がかいてある。四時十分。恭子がホテルへ来たのが二時半ごろだから、それから風呂へ入って——そんな時間に私はもうぐっすりと眠りこけていたのかと、恭子は思った。ベッドのわきの応接セットのテーブルには、十本近いショートホープの吸い殻が山になっている。長かったり、短かったり、ねじれていたり、不揃いな吸い殻だ。ティバッグのほうじ茶を飲んだ跡もある。

すっかり満足しきって寝息をたてている女の傍らで、目が冴えて眠れない男の苛々した様子が思い浮かんできて、恭子はくすりと片頬をゆがめた。

で、信太郎はいくら置いていったんだろう、メモの下に二つに折ってあった一万円札を勘定してみる。一枚、二枚……五枚ある。昨夜恭子が渡した十万円のうちの半分だ。信太郎はこのホテルに前の晩から泊ったはずだから二泊分、五万円ではすまない。その不足分は、男にさんざんしたいことをしてもらって眠り呆けていた自分への罰金だと恭子は思った。女と泊って明け方も待たずに何処とも知れず消えてしまう男も男だが、悶々と眠れぬ男を尻目に、出てゆくのもわからず安眠する女も女だ。どっちもどっちという形容は、こんなときのためにあるのではないかと、もういちど恭子はくっと自嘲めいた笑いを声に出した。

正面の大鏡に寝乱れた髪の女の顔がうつっている。熟睡したせいで、今朝はきっと眼の下のたるみが少ないだろうと、中指でちょっと目尻を吊りあげて眼を狐にしてみる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寒さがふいに背を刺す。

部屋が乾燥すると風邪をひきやすいからと男のいうままに暖房のスウィッチを消して寝たせいだ。カーテンを少し開けると、曇り気味で、まだしっかり朝陽にもならない弱い陽の光が入ってきた。自分の姿しかうつっていない鏡を覗きこんでいるうちに、恭子はいいようのない心もとなさに襲われ、鳥が飛び立つような素早さで部屋中に散らばったシャツや下着を拾い集めはじめた。

靴下が片方ない。白いアンゴラの履きやすい一足しかない靴下だ。ブーツのなかにつっこんだのかと、ブーツを逆さにしてふってみる。腹ばいになって椅子とベッドの下を覗きこむ。……みじめだ、という思いがこみあげる。まるで居なくなった男を捜しているみたいだ。

「靴下なんかどうでもいい」はっきり独り言にして恭子はつぶやいた。ただちょっと家へ帰りつくまでの間、足の指先が冷めたいだけのことじゃないか。「靴下なんかどうでもいい——」うろ覚えの、ジャズのスタンダードナンバーのメロディになった。何度も同じフレーズを口ずさみながら、靴下のところを「男」にかえている。

ハンガーの音を乱暴にたててクローゼットからコートを引きずり出し、肩にはおる。泊ってゆっくりするつもりで持ってきた、着がえのセーターやパジャマ、化粧品の入った紙ぶくろで両手はたちまち満杯になる。そのうえに、男が読まなかったスポーツ紙を束にして脇にかかえこむ。部屋を出ようとして思いつき、洗面所にとってかえして使用しなかった歯ブラシセットと石鹸、シャワーキャップを紙ぶくろのなかに放りこむ。おっといけない、サングラスを忘れるところだった。部屋の扉をあけっぱなしにして、恭子は脇目もふらずエレベーターに乗り、大股でフロントの方へむかって歩いていった。

「なんだいママ、朝っぱらから血相かえて」

後ろから肩をたたかれ、ふりむくと磯貝が立っている。磯貝は恭子が赤坂でやっているスナック「泥の花」の客だ。本業はよくわからないが、金融を表看板にして水商売の経営者などに小金を貸しつけている遊び人だ。昨夜も来て銀座の女と待ちあわせ、閉店までねばっていた。

「男にでも逃げられたのか」

両手に荷物をかかえこんで、息せききっている恭子の様子を、磯貝は面白いものでも見つけたように眺めまわした。逃げられたのか、その言葉が核心をついていたので、恭子はうろたえて開きなおる口調になった。

「ご明察といったところよ、お陰さまで」

「お陰さまはよかったが」磯貝はなおも揶揄(からか)いかげんで恭子の前に立ちふさがる。「我々の深夜のマドンナがその姿じゃいただけねぇな、もうちっと粋な朝帰りにしてもらわないとよ」

ここは店じゃないんだから、客と無駄口をきいてる暇も必要もないと恭子はじりじりした。放っといてよといいたいのを辛うじて押さえて「ね、そこどいて通して」とサングラス越しの上眼づかいになる。

「まっすぐしか行けねぇのか、猪みたいな女だな。その調子で男に惚れるなよ、三十過ぎると怪我は重いぜ」

軽口を叩きながらも磯貝は太ったからだを横にして恭子を通してくれた。磯貝の口裏から、信太郎のことを知っているなと恭子は思った。それでなくても地獄耳の磯貝が、近頃銀座界隈でも噂になっている信太郎と恭子の仲を知らない筈がない。磯貝の脇をすりぬけて恭子は会計と表示してあるフロントの端の列に並んだ。外人客の多いチェックアウトタイムで列は遅々として進まない。恭子は自分を置き去りにしていった男が、いまごろどこで寝ているだろうと考えた。いず

れ女のところに決まっているが、明けがたの四時五時に男がふらりと訪れて文句もいわず迎えてくれる女というのは、どんな種類の女だろう。私の側にいるより楽に眠れて、徹夜で男の相手を務められる女、しかもセックス抜きで、だ。

恭子は信太郎が「泥の花」へ一度だけ連れてきた、痩せて貧相な胸の映画のスクリプターを思い出した。引っつめ髪と筋の浮き出た項、あの女は少なくとも私より七つ八つは老けている。信太郎が三十だから十歳は年上だろう。信太郎の横顔に食いいって粘りつく眼つきが、あきらかに薄情な男に惚れぬいた女の不幸を物語っていた。

信太郎はいったいあの女の僅かな貯えをいくらくらいせしめたのか。乏しい給料のなかから爪に火を点すようにして、貯めた金にちがいないのに。五十万か百万か、いずれにせよ、それは恭子が信太郎に貢げる金額と、桁が一つは違っているはずだ。

ホテルの支払いは意外に嵩んでいて、合計八万五千弐百何十円という半端な金額だった。恭子は信太郎が置いていった五万円の他に、自分の財布から四枚の一万円札を補充しなければならなかった。

一枚二枚と数えてキャッシャーに渡しながら、惜しい、と思った。無意味でもったいない気がする。外れ馬券を最初から承知で買っているみたいだ。それよりももっと激しい、泥棒に追い銭という言葉が恭子の脳裡を往来した。浮かない顔でフロントをはなれ、駐車場へ行くエレベーターに乗りこもうとすると、磯貝が見知らぬ男の連れとその前に立っているのがみえた。恭子は気がかわって、ホテルのコーヒーショップへ踵をかえした。空いてる席をみつけて荷物を先に手荒く下ろし、むかいに腰をかけた。

コーヒーとハーフグレープフルーツを前に、仔細にさきほどのホテルの領収証を点検する。

12/17	ROOM	21500
	GRATUITY	2150
	TAX	1950
	ROOM SERVICE	5300
	PAID OUT	7720
	TELEPHONE	10210
	MINI BAR	10800
12/18	ROOM	21500
	GRATUITY	2150
	TAX	1950
	BALANCE DUE	85230

TAXまでは部屋代とわかる。次のルームサーヴィスは部屋に軽い飲物かコーヒーでもとったのだろう。ペイドアウトは立替金だ。マッサージが一回三千七百円だからダブルでとって、端数は今朝の新聞代とこれも納得がいく。納得がいかないのはそのあとの電話とミニ・バーの値段だ。

電話は合計の後に上ケタの相手番号の数字が明記されるので長距離ならどこへかけたかがある程度わかる。06は大阪、075は京都だ、045は横浜、0429はいずれ東京近郊だろう、四本のうち京都がいちばん長く話している。相手はどうせ女に決まっている。「うん、独りだよ独り、当りまえじゃないか馬鹿」などといい気になって真夜中に長電話をかけている男の様子が浮かんできて小癪(こしゃく)に触る。

電話より気になるのはミニ・バーで、つまり部屋に備えつけのミニ・ボトルと、ミネラルウォーターや簡単なつまみの入った冷蔵庫の中味の使用料金なのだが、一人で一万円も飲むというのは普通じゃない。きっと客があったのだろうがその客とは、当然これも女、だ。だがしかし、一晩中訪問客の女と酒を飲んでいて、いつ他の女にてれてれと長距離電話をかける暇があったのか。深くなった女にはかかってきても「いまだめだ、明日にしろ」とにべもなく云い放つか、「この番号にそっちからすぐコールバックしろ」とかけさせて、電話料金が嵩ばらないようにする智恵は持ちあわせている男だ。男の方からかけて長電話をするぶんにはまだ恰好をつけているほんの最初の段階だから、肉体関係はない相手だろう。

部屋に女をおいて、片手で裸の女の胸を触りながら、意外に図々しく京都の女に電話をかけたのかもしれない。

恭子は無機質な数字と英文のタイプの文字の透き間から、自分が泊りに来なかった前の晩の男の行動を読みとろうと強い眼になった。その眼は、いつか店で貧相なスクリプターが、信太郎の横顔を突き刺してまつわりつかせていた、不幸な女の眼つきと同じだ。

あんな男、しょせん一人の女の胸にはまる一日も止まっていられないさすらい鳥か、はぐれ狼みたいな男と、充分知りぬきながら恭子は信太郎をあきらめきれない。

信太郎を知ってほぼ一年——。

済し崩しに注ぎこんだ金額の合計は、もはやゼロが六つの百万台では済まなくなっている。

二

信楽信太郎は作詞家である。

いわゆる詩人と呼ばれる純粋詩の作家ではなく、流行歌のレコード作家である。いまから七、八年まえに男女のデュエットで大流行したヒット曲のせいで、恭子も名前くらいは知っていたが、はじめて紹介されて顔と名前が一致するのに多少時間がかかった。信楽信太郎の名前が世間に知れ渡っているのは、作品のおかげというより、高名な女優との二度に亘る離婚歴のせいである。最初は二年余り、次の結婚は半年も持たなかった。いずれも信太郎の女出入りと金銭的な破綻がもとであるらしかったが、顔を被った細い指の間から泪を滴らせて「結局……あのひとと私は別世界の人間だったのです」と泣き伏す女優の記者会見を、偶然に恭子は見ていた。抱かれて寝て、結婚までした男を、そんな風にいって人前で泣きじゃくってみたいものだと、恭子はその光景に憧れた。たまたま恭子が常に人眼をはばかるくせに長いぬるま湯みたいな安全牌の恋しかしていなかったからである。短い同棲で男をすっぱり諦めるのも辛かろうが、反面きっと我を忘れて激しく燃えあがるいい思いもあったに違いない。TVカメラは今度は男の方をうつし出した。不精髭を生やしサングラスをかけた男は、路上でレポーターの女につかまったが、返事もせずにタクシーで走り去っていった。

その事件のあとも、モデルや歌手との情事で信太郎の名前は週刊誌などにちらちらしていたが、現在は確乎たるものはなさそうだ。

信太郎がしょっちゅう金が無くて素寒貧なのは、弱いくせにつっこみにつっこむ麻雀と競馬のせいだ。まとまった一万円札が指先に触ると、それは信太郎にとってもはや馬券か点棒でしかない。

そのうえ信太郎は現在ほぼ無収入に近い。ヒット曲がなくなっても、作詞家信楽信太郎の存在は何となく歌謡界に生きつづけているが、華やかな世界で何となく生きている名前というのが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com